

# 保護者1人1人に「開かれた学校」を目指す校長室だより

足利市立葉鹿小学校 川崎 廣三

## 1 はじめに

小学校学習指導要領〔総則〕の第5 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項の2, (11)に「開かれた学校づくりを進めるため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること」と示してある。校長としてこのことをどう受けとめ、どのように関わっていったらよいか、その1つの方法として、校長の立場で学校の諸活動を紹介する校長室だよりの発行があると考え、実践した。なお、親しみのもてる校長室だよりにしたいという願いから、葉鹿の地を流れる彦谷川にちなんで、その名前を『ひこやがわ』とした。

## 2 実践のねらい

校長室だより発行のねらいは次のようなものである。

- (1) 学校としての説明責任を、できるだけリアルタイムで果たす。
- (2) 保護者に学校での諸活動を知らせることにより、児童指導や教科指導の面でも理解と協力を得やすくする。
- (3) 総合的な学習など、その内容やねらいが分かりにくいものについて、具体的な活動を通して紹介することにより、理解と関心を深める。
- (4) 校長としての願いを知らせることにより、学校をより身近に感じていただき、家庭と学校の連携を強化する。
- (5) 新しい学習指導要領の完全実施の年にあたり、葉鹿小学校及び小学校教育一般への関心を高める。

さらに、足利市での初めての勤務という私の個人的な事情から、保護者1人1人に自分なりの考えを伝え、御批正を仰ぎたいという思いがあり、そのことも校長室だよりの発行のかくれたねらいの1つとなっている。

## 3 実践の方法

- (1) 家庭との連携を図る上で有効と思われることや今日的な課題などを、そのつど校長室だより『ひこやがわ』に載せてPTA会員に配布する。
- (2) 『ひこやがわ』に対する意見、感想等を教育活動に反映する。
- (3) 学校評議員会の説明資料の1つとして活用する。

## 4 実践事例

- (1) 子どもは親の背中を見て育つ??? -抜粋- (No.1.H14.4.8)

第1回目から私事で恐縮です。私には男の子が2人います。たまたま私の向かい側で食事をしていて次男を見て、ふと思ったのです。なんと品のない食べ方をしているんだ！それまで、そういう位置で何度食事をしたか分からないのに、その時に限ってどうしてそう思ったのか、不可思議というほかありません。それからというもの、口には出しませんでしたが、どうも気になってしかたありませんでした。そんなこ

とが続いていたある日、もっとショッキングなことが起きたのです。次男の食べ方は、私のそれとそっくりではありませんか。なんとかして否定したいのですが、いったん気が付いてみると、さりげない細部にいたるまでそっくりなのです。

品のない食べ方の原型をつくったのは、間違いなくこの私です。言うまでもなく、意識的にそのような食べ方をしていたわけではありません。私の食事の所作はまったくのオートマチック。無意識の為せるわざなのです。

私たちは、絶対に自分の顔を直接に自分の目で見ることはできません。顔は常に他者に向けられたものとしてあるのです。同じことは背中にもいえます。背中に受ける視線は、背面からであるだけに、一層無防備です。意識の遠く及ぶところではありません。

次男は、対面する位置にあつて、私の発する無意識のパフォーマンスによるメッセージのシャワーを浴び続けてきました。それを彼のもっともやわらかな無意識の領野がキャッチし、身体様式として完璧な模倣を成し遂げたというわけです。

私たちが直接見ることのできない部分は、何らかの鏡像として、その似姿を把握するほかありません。次男は私の鏡像として、私には見えない部分を可視化してくれたのです。私は、今まで気付かなかった私像を1つ付け加えることができました。

子どもは親の背中を見て育つ。子どもたちは、親たちがもっとも無防備な部分に、決定的な影響を受けてしまうものなのです。こんなはずではなかったのに。「はず」は意識の為せるわざ。そんなものは、無意識の発信に比べたら、微々たるものにすぎません。子どもの無意識の言動を自分の鏡像としてとらえ、自己理解の一助とするとともに、私という存在は子どもにとって何なのだろうという反省の契機にしなければならない。私はつくづくそう思いました。

《伝えたいこと》 家庭は家族にとってリラックスできる場である。自ずと無意識の言動が多くなる。それと、子どもへの意識的な働き掛けとの間に乖離が生じたとき、子どもは分裂の危機にさらされる。建て前だけでは教育はできないという自戒の念をこめて、そのことを伝えたかった。

## (2) 心の教育について・・・ (No.2. H 14. 4.10)

心の教育ということが、このごろしきりといわれます。

でも、いざこのことについて考え始めますと、すぐに迷路に迷い込んでしまいます。我が子の教育、幼児教育というとき、我が子も幼児も、目で見ることでも手で触れることもできます。対象がはっきりしていて、それに対して意図的に働き掛け、プラスの変容をもたらすこと、そのようにとらえることができます。しかし心の教育というときの「ココロ」には、そのような実体はありません。これが私のココロですといって手のひらにのせて、相手に示すことなどできないのです。また、腕を磨くという表現があるように、心を磨くという言い方がなされます。だからといって、腕の教育とは言わないでしょう。なんだかわけが分からなくなってしまいます。では目には見えないけれど、だれもがその存在を疑わない心の教育とは一体何なのでしょう。

ところで、心を磨くことは独りでできるでしょうか。とても無理です。心を磨く場は、「あいだ」、すな

わち人と人との「あいだ」にあるといえます。関係が心を育てるのです。心の教育とは、このあいだがらに働き掛け、成長というプラスの変容をもたらすこと、言い換えれば豊かで温かな「あいだ」がらを生み出すことであるといえるのではないのでしょうか。

空気は目に見えないけれど、風が木々を揺らすことによりその存在を知ることができます。それと同じように、目に見えない心は、人々の言動としてその有り様をとらえることができます。心の成長は、言動の変容として把握できるといえます。

足利市出身の書家で随筆家の相田みつを氏の書に、

その ときの 出逢い が

というのがあります。それに、こんな文章が添えられています。

出逢い／そして感動／人を動かし／人間を変えてゆくものは／むずかしい理論や／理屈じゃないんだなあ／感動が／人を動かし／出逢いが／人間を／変えてゆくんだなあ……

人と人との「あいだ」のネットワークが心を生み、変容をもたらすことは先にみたとおりです。「感動」的な人との出会いは、ネットワークに揺さぶりをかけ、心（言動）の変容をもたらします。新年度のスタートにあたり、一人一人の児童に素敵な出会いがありますように、と願わずにはられません。そして私たち葉鹿小学校の全教職員は「こころ」をこめて子どもたちと接してゆきたいと思っています。

《伝えたいこと》 一口に心の教育といっても、その内実をとらえるのは大変難しい。各家庭でそれぞれ考えていただく上で、私なりの考えが誘い水になれば、という願いを込めて書いた。

### (3) 野菜づくり (No.8. H 14. 5.29)

2年生の教室の前に、ささやかではありますが菜園があります。2年生がクラスのお友達の2人のおばあさんのご指導をいただいて植えたものです。ナスにピーマン、ミニトマトがすくすくと育っています。子どもたちも、教えられたとおりにせっせと世話をしています。そのうち、6年生の協力をえて、EMによる米のとぎ汁発酵液を液肥として与える予定です。収穫が楽しみです。このごろは、ヒトやモノとの関係性の希薄化がしばしば指摘されます。私たちの口にするもののほとんどは商品として手に入れるものです。そこでの関わりは、品質や値段であり、モノそのものとしての関係性は断たれています。そればかりか、それを作ったヒトとの関わりもほとんど見えてきません。商品である以上は、そのモノ自体にこだわる必要はありません。Aが気に入らなかつたらA'にすればいいのですスーパーマーケットなどに、きれいに陳列された肉や魚や野菜からは、命をいただいているという実感はなかなかもてません。少なくとも私自身はそうです。これで、どうやって濃密な関係性を築いていったらよいのでしょうか。

収穫の喜びは、わたしの作ったミニトマトやピーマンを手にしたときに味わうものですスーパーで手に入れたものでは決して代用はできません。なぜならば収穫物には、それまでのさまざまな関わりまでもつまっているからです。交換は不可能なのです。こういった関係性の中でこそ、こまやかな心情が育っていくと考えられます。私は、収穫を喜ぶ子どもたちのつやつやの笑顔が待ち遠しくなりません。

ご指導して下さった2人のおばあさん方も、子どもたちのお礼の手紙に大いに感激したと聞きました。その感激の裏には、野菜苗を仲立ちとした、子どもたちとの直接のふれあいがあったことと思います。子どもたちは、今日(28日)、おばあさん方とさつま苗を植えるのを心待ちにしています。これから毎日、苗をよく見て、小さな変化も見逃さず一所懸命育てることを通して、子どもたち自身の心も、すくすくと育って行ってほしいと思います。

《伝えたいこと》 授業の質を高め、より生き生きとしたものにするために地域の教育力の導入を積極的に進めることが求められている。その具体例を示すとともに、ヒトやモノとの関係性についての私見を述べた。

#### (4) 子どもと遊び (No.9. H 14. 6.10)

校長室のベランダから、校庭いっぱい広がって遊んでいる子どもたちを見ていると、飽きることはありません。子どもたちの表情は千変万化。屈託のない動きと表情は、なにものにも邪魔されない、自然な命の発露を思わせて実にすがすがしいものです。遊びの中身を見ていて気付くことは、私の子どもどころと、その服装ほどは変わっていないということです。花いちもんめや達磨さんがころんだに興じている子どもたちを見ていると、なんともほほえましく思います。ただ1つ変わったなあと思うことは、体と体の直接接するというか、ぶつかり合うような遊びがあまり見られないことです。相撲やうまとびにはめったにお目にかかれません。四つに組んだときに、こいつは強いぞという感じは、頭ではなく体(腰)でとらえるものです。最近では、何にでも頭がしゃしゃり出て、体でとらえる領域がどんどん減っているように思います。遊びも例外ではなさそうです。

ところで、遊びは人間にだけ許された特権ではありません。いつかふれたことがある我が家の庭猫たちも、子どもころは同胞同士でよく遊びます。物陰に潜んで飛び掛かり、相手の喉元に噛み付く。まさにハンティングごっこです。決して牙は立てないという暗黙のルールもちゃんとあります。動物生態学・自然人類学が御専門の河合雅雄先生は「子どもは小さな探検家」と題したエッセーの中で次のようにいっています。「ニホンザルの自然群を見ていると、サルの子どもは実によく遊ぶ。生後半年もすると、アカンボザルは親からはなれ、アカンボグループを作って遊ぶ。母親は少しはなれた所から、アカンボの遊びを見ていて、何か危険を感じると、アカンボを抱きにいく。アカンボの方も、ときどき母ザルの元に帰ってきて、乳を飲み、愛撫を受けて、また仲間遊びに出かける」。さらにそれとの関連で、アメリカの心理学者ハーローの実験を紹介しています。「生まれたばかりのアカンボを1頭だけにして隔離飼育すると、成長してからまったく社会性を喪失したサルになり、仲間関係を結ぶこともできず、いろんな神経症状を起こす」というものです。「アカンボと母とだけで育てると、社会性もかなり健全に発達したサルに成長するが、ただ1つ……青年期になってから」の「性行動の異常」という「大変重要な障害が起こる」というのです。

サルから得た知見をそのまま人間に当てはめることはつつしまなければいけません。河合先生は「仲間をつくり自分たちだけの遊びにふけるということは、子どもの正常な身心の発達に大変重要なことだ」といっています。ファミコン等のヴァーチャルな遊びも結構ですが生きた人間を相手にした、全身を駆使した遊びの大切さを改めて再認識してもよいのではないかと思います。「サルでさえ、エイジグループを

作って、鬼ごっこやレスリングに興じお互いのぶつかりあいの中から社会性を育て、つきあいのマナーを覚えていく」といいます。ましてや人間おやとはいえないでしょうか。このごろの遊びの中から体と体が直接触れることがほとんどなくなってしまったことへの私の不安は、このへんに起因しているのかも知れません。

《伝えたいこと》 遊びが子どもの社会性の発達に、いかに深く関わっているかを、身体による直接体験と関連づけて示した。

(5) 心の音を奏でたい ～純粋なものは誰の心にもしっかり届く～ - 抜粋 - (No.10. H 14. 6.17)

先日は、かつてNHKで放映された『心の音を奏でたい』というドキュメント番組の録画を資料として、道徳の授業を行いました。ちょっと長い番組でしたし、大人向けのものでしたので、5年生の道徳の資料としてはどうかな、自分の思い入れの押し売りになるのでは、という不安を抱えての授業でした。最小限のガイダンスをして、すぐにビデオ視聴に移りましたが、最初の5分間で、私の不安はほとんど消え去りました。クラスみんなが、しっかりとした視線をテレビ画面に向けていたからです。

幼くして小児ガンのために視力を失う、というハンディキャップを負いながら、幼児期からオモチャよりもピアノの音に心惹かれたという梯剛之（かけはし たけし）さんは、ひた向きにピアノに取り組みました。中学校を卒業すると、視力がないという理由で入学を拒まれた日本を後にして、母親とともにウィーンへ。どうか外国での生活やピアノのレッスンにも慣れた13才のときにガンが再発。自分の命のはかなさをいやというほど思い知らされた梯さんは、自分を取り巻くさまざまなものに、小鳥のさえずりや草花、木々や風の香りにも深い命の交わりを結ぶことになります。梯さんは、命の交流から生まれた思いを、ピアノに託して表現します。梯さんとの交わりを通して、ピアノも命あるものとなります。

子どもたちは、この間のことを、エピソードを含めて実によくとらえていました。それは、視聴後の話し合いでよく分かりました。

そんな梯さんは、ウィーンでの2度目の手術の直後に、天啓のようにして聴いたショパンのピアノ曲に導かれるかのように、いつしかショパンコンクール出場を決意するようになります。番組は1次予選、2次予選の模様を丹念に追うのですが、それは省いて、肝心の授業の方に移ります。ビデオ視聴後、多くの子どもたちが自発的に感想を発表してくれました。その中から、いくつかを紹介しましょう。

「目が見えないというハンディがあるのに、あんなにピアノが弾けてすごい。」

「目が見えないことは大変なことだと思うけど、体に何のハンディももたない人たちをあんなに感動させるなんてすごいと思う。」

「ピアノを通して、自分を出しているのがすごいと思う。」

.....

最後の発表は、お母さんと森を散歩したときの印象を、即興で演奏したことをふまえているだけでなく、ショパンの曲の演奏に、命あるものとの交流を通して培った自分自身の思いを込めていることに触れたもので、私自身驚きました。この子は、まさに「心の音を奏でたい」という思いをしっかりとキャッチしたのです。子どもの感性の鋭さに感動しました。

梯さんは、番組の中でいくつも心に残ることばを話していますが、次のことばは、単なる私の思い入れ

の押し売りになるかもしれないという恐れを押さえきれずに、このビデオを資料として取り上げさせたものです。ショパンコンクールの行われたワルシャワで、いつものように母親と一緒に散歩をする途中で出会った、そびえ立つような菩提樹を抱えながら、お母さんに話しかけたことばです。

根元はしっかりしていて、上の部分は柳の葉っぱみたいに柔軟に風にそよぐようにゆれて……根元は踏ん張っているという……それは、人生にもいえるよね。」

23才の視力を奪われたピアニストのことばとして、そして、命あるものとともにあることの喜び、命のはかなさ、死の恐怖を体感した人のことばとして、聞くたびに、いつも私の心に重く響きます。授業は、思い入れの押し売りにならないように、このことばにはさりと触れることで終わりにしました。

《伝えたいこと》心の教育の重要性がいわれている。5年生の道徳の授業をする機会に恵まれたので、道徳における心の教育の実践事例として報告し、本校における取り組みの一端を紹介した。

#### (6) アメリカからの便り ー加筆・抜粋ー (No.11. H 14. 6.24)

多くの人々を驚きと悲しみのどん底に突き落とし、弱冠二十歳で急逝してしまった私の長男の親友の弟から私宛てにエアメールが届きました。彼は英米文学の勉強のために、ロッキー山脈を仰ぎ見るアメリカ西部の町にある大学に留学したのです。どうにか身の雑事も片付き、留学生仲間の中に1人2人と友達もでき、大学にも少しは慣れはじめたある日、私宛てに1通の手紙をしたためてくれました。その手紙は、私にさわやかな感動をもたらすとともに、「生きる力」を考える上で、多くの示唆を与えてくれました。本人の承諾を得て、その手紙の抜粋を『ひこやがわ』に掲載させていただいた後で、私は次のようなコメントを書きました。

今、子どもたちに「生きる力」をつけることが、教育界の大きな課題の1つです。「豊かな人間性」を培い「自ら学び自ら考える力など」を伸ばすことが「生きる力」をつけることにつながると思います。だとしたら、この手紙が伝える生活実践には「生きる力」がみなぎっているといえないでしょうか。日常の生活を支える1つ1つのことを自らととのえ、処理をする。それには大変な労力とエネルギーがいるわけですが、それを彼は手を抜かず、億劫がらず、しかも「淡々と」クリアしていきます。そうしないと、そもそも生活が成り立たないのですから。また、異文化のなかにぼつんと飛び込んでいって、何も考えずにいることの方が難しいでしょう。それが生活に直結したことであれば、自ら考え、判断したことはただちに結果となって自分に跳ね返ってきます。その結果をしょいこみ、「自ら考え」「つきもの」の「困難やトラブル」を乗り越え、自らをよりよい方へ導いていくしかないのです。異文化に新鮮な視線をそそぎ、自国の文化を今までとは違った視点から見つめなおすことも、誰の強制によるものでもありません。タイ出身の友人や6つの言語を話すマレーシア人との交流は、彼の「人間性」をより豊かなものにするでしょう。だからといって「生きる力」をつけるためには、外国に行く必要があるなどといったわけではありません。どの家にも家族で培ってきた文化があります。(ときには何代にもまたがって。) 友達の家に行くことは小さな異文化体験といえます。異なる文化を背景にして育った子どもたちの集まる学校は、国際都市のようです。彼が実践したことの多くは、程度の差はあれ日本にあっても、困難を伴うものです。学習の場は、私たち

の日常にゴロゴロしているといえます。それと、どう立ち向かうかが問題なのだと思います。逃げ道の多い分だけ、日本にいるほうが難しいかもしれませんが。

「生きる力」は、家庭だけで、あるいは学校独力でつけられるものではありません。地域の方々の協力も得て、3者で手を携えて、互いに協力し合うなかで、育っていくものだと思います。

追伸で彼がふれた『荒野のロマネスク』は、私が餞別として贈った本の名前です。アメリカのマイノリティーを扱ったこの本は、彼の研究テーマや日本人としての彼自身を見つめる上で、少しは役に立つのではと考えて贈りました。私などよりずっと若くして、たくましく成長した（「生きる力」を身につけた）彼の感想を楽しみにしています。

《伝えたいこと》 今日、子どもたちに「生きる力」をつけることが、学校に課せられた大きな課題である。各家庭で考えていただくきっかけになればという願いを込めて、アメリカからの便りをもとに、「生きる力」をつけるということはどういうことなのか、私見を述べた。

#### (7) たかがあいさつ されどあいさつ (No.12. H 14. 7. 3)

子どものあいさつについて、何度かうれしい思いをしましたのでお知らせいたします。はじめは、葉鹿地区民生委員・主任児童委員協議会の席上でした。1人の民生委員さんから「このごろ葉鹿小の子どもさんから、よくあいさつをされる」という発言がありました。すると、別の民生委員さんからも同様の発言がありました。しかも「顔見知りの近所の子ではない子からも、あいさつをされる」というのです。そんな日は、1日さわやかな気持ちでいられるのでとてもうれしいと話していただきました。その気持ちは私も何度も経験したことがありますのでよく分かります。

次は、私が直接体験したことです。私は、子どもたちの登校の様子を見たくて、ときどき交差点に立ったり、自転車で学区内を回ったりします。すると、中学生から（真新しいバッグから推すと、多分1年生でしょう）あいさつをされるようになったのです。決して多くはありませんが、少し前まではゼロだったのですから私にとっては大きな変化です。しかも、中学生にとって私は、小学校の先生らしいということは薄々は感じていたとしても、一度もことばを交わしたことの無い者なのです。さらに、もっと驚いたことがありました。自転車通学の男子高校生から「おはようございます」という元気なあいさつをされたのです。朝寝坊でもしたのでしょうか、片方の手にはおにぎりを持っていました。背にしたバッグはスポーツバッグでしたから、きっと運動部に入っているのでしょう。昨日はへとへとに疲れてしまって起きられなかったのかなあ、などと余計なことまで想像してしまいました。黙って私の前を通り過ぎていたら、こんな想像はしていなかったはずです。「おはよう」とあいさつを返した後で、思わず「気を付けて行けよ」と、勢い良く去っていく背中に向かって声をかけてしまいました。私は、何となくはずむ思いで学校にもどりました。

このように、子どもたちの間にあいさつが定着しつつあるのは、言うまでもなく、ご家庭での協力があってのことです。私自身、登校途中にあいさつを促すお母さん方のお声がけに何度も出会いました。さわやかな気分にならせてもらう分だけ、私も気持ちのよいあいさつをしなければ、ついそんな思いにかられます。

あいさつについて思うことを、学校新聞「緑が丘」に書きました。是非、ご一読いただけたらと思います。

たかがあいさつ、されどあいさつです。今以上に、葉鹿の地にみんなのあいさつが満ちあふれることを願ってやみません。

《伝えたいこと》 年度はじめ、私なりに呼び掛けて、全校体制であいさつ運動に取り組んできたことが、それなりの成果を上げつつあるのは 家庭や地域社会の協力のおかげである。そのことに感謝するとともに、具体的な成果の一端を紹介した。

**参 考** 「あいさつ」からみえてくるもの（学校新聞「緑が丘」No.115号）H 14. 7.19 発行

4月。本校に赴任して初めての朝会で、あいさつについて話しました。着任して間もないことで、葉鹿小の実態をふまえてというわけではありません。世の中全体が「ひきこもり」に象徴されるように「かすり傷を恐れ、誰となく心に、壁を立てる中で」（小椋佳『逢うたびに君は』より）葉鹿小に、そして葉鹿小の学区に子どもたちの元気なあいさつが響きわたったら、どんなに素晴らしいだろうと思って、あいさつを取り上げた次第です。

河合雅雄先生が、まだ京都大学にお勤めしていたときに著したエッセイ集『サルが目ヒトの目』の中で、チンパンジーも人間も、「……しばらくの間お互いが顔を合わせなかったというだけで、どうして挨拶という行動を必要とするのだろうか。この問題の底流にひそんでいるものは、意外に深遠で、動物の親和的な社会関係とは何か、どうすれば親和的な社会関係を保つことができるのかといった根本問題に深くかかわっているらしい」と指摘しています。さらに人間社会に目を転じて、「……文明社会が高度に発展すると共に、挨拶を忘れ、相手に対して微笑を投げかけることを忘れた人達が出現してきた。大人たちはこの現象を道徳の低下といった古い倫理基準をたてにとって嘆くが、問題はもっと深いところにねざしている」といいます。引用が長くなって恐縮ですが、もう少し河合先生の考えに耳を傾けたいと思います。「若者たちは、個人の自由を至高のものとして認めるといった立場から、親和関係を結ぶことですら、ある種の束縛であると主張するかも知れない。そうなれば、挨拶行動は無用であり、わずらわしいものとして映るであろう」。そして、そういった若者たちが示す「強い自己主張、他人への無関心、攻撃性、無気力は、内奥にひそんでいたなわばり性が」仲間内の「彼らの行動を無意識のうちに支配し」ているからだということです。

あいさつというきわめて日常的な現象を切り口に見えてくるものは、意外と奥深いものであることは、間違いなさそうです。

これからも、地道なあいさつ運動を続けてまいりたいと思います。

**(8) 共生について (No.16. H 14. 9.17)**

皆さんよくご存じのように、葉鹿小学校では総合的な学習の柱の1つとして環境教育に力を入れてまいりました。地道な活動が認められ、これまでにいろいろな場所で活動の様子を発表してきましたが、このたびは日本環境共生学会のお招きで、9月28日（土）に千葉県市川市にある千葉商科大学で発表することになりました。そこで、今回は“共生”についてご一緒に考えてみたいと思います。

21世紀は「共生」の時代などと言われることがあります。20世紀に飛躍的に発展した科学技術が、私たちの生活をこれまでになく便利で豊かなものにしてくれた一方で、地球規模での生活環境の悪化や多く



の種の絶滅をもたらした反省に立つてのスローガンかと思います。たしかに、生物学でいう「共生」は、「異なった種の生物が同一の場で生活することによって、互いに利益を得ている状態つまり『相利共生』という現象を指す」のが一般的ですが、「一方だけが他方を利用して利益を得る『単利共生』や『寄生』という状態も含まれ」ます。とすると、単に「共生」というよりは「単利共生」から「相利共生」へというべきかもしれません。いずれにしても人間の力があまりにも巨大になってしまい自ら制御する以外にコントロールするものがなくなってしまうために、様々の矛盾が限度をこえて見えはじめてきたということへの反省を促しているのでしょう。

しかし、「単利共生」に慣れ切ってしまった私たちにとって、これはなまやさしいことではありません。そのことは、私たちの細々とした日常にちょっとだけ思いをいたすだけですぐにお分かりいただけると思います。1度手に入れた便利さをそうやすやすと手放すことができないのが私たちの現実です。

そのようなことを考えると、本校で取り組んでいる環境教育が、二重の意味で時宜を得たものであることがお分かりいただけると思います。1つは、感性豊かな子どもたちのうちの実践であること。2つ目は、子どもたちを取り巻く環境が、具体的な働き掛けを必要とする段階にきている、ということ。

宮沢賢治は『農民芸術概論要綱』（花巻の農民たちを前にして語った講演）の中で「世界ぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」と言っています。青臭い理想主義として一部の人人を除いて、長い間顧みられることもありませんでしたが、ここにきて、この言葉のズッシリとした重さを感じます。

研究PTAを契機に、“生ゴミ0（ゼロ）の日”の活動も始まりました。何かとお忙しいことと思いますが、それぞれのご家庭で、できる範囲でのご協力をお願いいたします。

伝えたいこと）本校で取り組んでいる総合的な学習の3つの柱の1つである環境教育についてのご理解と、それぞれの家庭でできる範囲での協力を呼び掛けた。

## 5 おわりに

実践記録として、校長室だより『ひこやがわ』（1部抜粋、加筆）のいくつかと、それとの関連で、学校新聞『緑が丘』に載せた「あいさつからみえてくるもの」を紹介した。またそれぞれの最後に、『ひこやがわ』には載せなかった、私の発行の意図や願い等を示した。

このささやかな便りが、どうか回を重ねることができたのは、読み手である保護者の方々の温かい励ましがあつたからである。それが、次回の発行を促す原動力ともなった。しかし、反省すべき点も少なくなつた。いくつかを上げてみる。

- (1) 表現は簡潔ですべての保護者にとって読みやすく、分かりやすかつたかということ、自分のいいたいことが先に立ってしまい、必ずしもそうとはいえなかつた。
- (2) 私のところに戻ってくる保護者の反応は限られていたため、それを便りに反映することが難かつた。
- (3) 便りを読んで、直接私と話し合いたいという声を聞いたが具体化できなかつた。また、どのようにして実現したらよいか、自分の考えもまとまらなかつた。私の時間的な制約の他に、限られた1部の人たちとの対話になる恐れがあつたからである。

いろいろと問題は生じたものの、成果らしきものもいくつかあつた。

- (1) 保護者の方々が自分のことばで、自分自身で考えるきっかけを与えることができた。

- (2) 紙面から私個人の顔（思いや願い等）をある程度表現することができ、保護者から親しみが増したとの反応をいただいた。（この反応は私にとって大きな喜びであった。）
- (3) 便りで紹介した学年の先生方からも感謝の声をいただいた。

これからは、先に上げた反省点を克服し、より充実した『ひこやがわ』を発行し続けられるよう努力してゆきたい。

#### 《参 考》

以下に、実践事例として取り上げなかった『ひこやがわ』のタイトルと内容の概略を示す。

- No. 3 「彦谷川探険」 ☆4年生で実施した総合的な学習について
- No. 4 「子どもを内側から理解するには」 ☆体験的子ども理解の方法について
- No. 5 「見慣れた街を探険する?!」 ☆3年生の社会科の学習の紹介と総合的な学習への発展について
- No. 6 「新聞のコラムから」 ☆個性とは、また、個性を伸ばすとはどういうことか
- No. 7 「修学旅行!!!」 ☆6年生の修学旅行同行レポート
- No. 13 「1学期の終業式を迎えて」 ☆終業式で児童に話したこと
- No. 14 「竜頭蛇尾」 ☆私の夏休みの思い出と今年の夏期休業中に体験したことについて
- No. 15 「叱る」 ☆叱る、叱られることにまつわる思い出や今日的な傾向と私感
- No. 17 「10月7日の朝会で」 ☆当日児童に話したことと保護者向けのコメント

## 評

「教育は、言うまでもなく、単に学校だけで行われるものではない。家庭や地域社会が、教育の場として十分な機能を発揮することなしに、子供の健やかな成長はあり得ない。」これは、中央教育審議会第1次答申（平成8年7月）において生きる力を育む視点から述べられている言葉です。さらに同答申では、「子供の育成は学校・家庭・地域社会との連携・協力なしにはなしえないとすれば、これからの学校が、社会に対して『開かれた学校』となり、家庭や地域社会に対して積極的に働きかけを行い、家庭や地域社会とともに子供たちを育てていくという視点に立った学校運営を心がけることは極めて重要なことといわなければならない。」とも述べ、学校内部の経営に閉じこもらず、地域に開かれた経営の必要性が提言されております。このことは、生涯学習の立場に立って設定された「足利市の教育目標」における、各種の教育機能の統合、いわゆる教育機能連関の考え方と軌を一にするものであります。本研究論文は、このような考え方を踏まえ、校長としての立場から、校長室だより「ひこやがわ」を通して、開かれた学校づくりを目指されたものと拝察いたします。

ここに紹介されております数々の学校だよりの内容、そしてその行間からは、子供に寄せる限りない愛情と、学校と家庭・地域社会とが一体となってみんなで子供を育てるという校長としての思い・願いが伝わってまいります。ご自分の体験から、また校長室のベランダから見る日常の具体的な子供の姿などから話題を取り上げ、保護者にとって、学校をより身近に感じ取らせ、親しみのある内容が紹介されており、これからの開かれた学校づくりに対して多くの示唆を与える実践的な研究であります。

ご多忙の中、本市教育の充実のため玉稿をいただきましたことに対しまして深く感謝申し上げ、評とさせていただきます。